

日台の電話会話における新たなターンの開始 ——あいづち使用の有無という観点から——

陳 姿 菁*

キーワード: あいづち, 日本語, 中国語, 台湾語, 新たなターン

要 旨

本研究では、聞き手が次の話し手となり、新たなターンの始まりの位置に生起するあいづちを対象として陳(2001, 2003)の基準を用いて、日台の相違を比較した。結果として、日本語は台湾の「国語」と台湾語より、前置きなしにすぐに新しいターンに移行する割合が多く、日本語は全体の31.1%、台湾の「国語」と台湾語は25.2%を占めていることが分かった。全体の前置きの形式から見てみると、日本語ではあいづちより「あのう」や「それで」などのディスコースマーカーを用いること、他方、台湾の「国語」と台湾語ではディスコースマーカーよりあいづちが多用される傾向のあることが分かった。そして、あいづちの形式においては、日本語では「 β 」(「そう」系などは)のあいづちの形式が「 α 」(「はい」系)よりやや多く見られたが、比較的均等に使用されている。それに比べて、台湾の会話では「 β 」(「對」系、「*heⁿ ah*」系など)のあいづちの形式が圧倒的に多く用いられていた。

1. はじめに

あいづちを置かずにターンを取ることが日本語学習者の特徴であり、日本語母語話者に違和感を与えるものであることが指摘されている(伊藤1993など)。そして日本語のあいづち指導を会話指導の一項目とし力を入れるべきであるとして、これまでに様々な方法が提案されてきた(伊藤1993, 村田2000など)。すなわち、日本語では新たなターンを開始するときは前置きとしてあいづちを置くことが望ましいと言われてきた。

しかし、これまでの研究では、新たなターンは常にあいづちで始まっているのか、そもそもあいづちのほかにも特定の形式が存在しているのか、あるとしたら、それらの分布比率はどうなっているのかといった問題はあまり触れられていない。

新たなターンの開始は A に続く B として次のように示すことができる。

* Chen Tzuching: 長栄大学応用日本語学系及び日本研究所専任助理教授。

A: _____

B: φ _____

実線は実質的発話を示す。「 φ 」はターンの始まりの形態を示し、実質的発話に先行する。
前置きのある場合とない場合の2つが考えられる。

会話指導の現場では「 φ 」をあいづちとして捉え、あいづちで新たなターンを開始すると言われている。しかし、この「 φ 」が本当にあいづちなのか、また、あいづちであるとするなら、その役割は何なのかについての知見が得られているとは必ずしも言えない。本研究は日台の「 φ 」の実態を明らかにする。

2. 先行研究

話者交替の視点からターンの始まりについて触れた先行研究としては小室（1995）が挙げられる。小室（1995）は日本語母語話者を中心にどのように発話の主導権¹が交替するのかについて分析し、さらに日本語学習者との比較を通して、学習者の話者交替に関わる学習の問題点について考察を行った。小室は「聞き手配慮・話し手配慮」という原則で話者交替の基本形を以下のように提示した。

基本形【日本人の turn-taking】

A: 内容 a 内容 a, c は turn を握っての発話、内容のない b は実質的な意味を含
: b まないあいづちなどを指す。（小室 1995: 55）
T C: 内容 c

小室はこの基本形からさらに5つの派生形に分類し、マーカー無しに実質的発話で始まるターンの取り方は不適当な話者交替であると指摘している²。しかし、日本語母語話者の実際の会話においてのマーカー有りとはマーカー無しの発話の比率については論じておらず、日本語母語話者は必ずマーカーをおいてから発話するという客観的に判断することは難しいと思われる。さ

¹ 小室の言う発話の主導権とは turn を指す(小室 1995: 54)。

² 小室はマーカー無しで実質的発話で始まるターンの取り方は派生形③でマーカーが用いられないモデルにあたと論じている。派生形③とは内容cの頭にマーカー(「まあ」、「いや」など)がある場合(1995: 60)。

派生形③ A: 内容 a
T C: 内容 c

らに、マーカーとして使われている形式についての詳細な記述も見当たらない。

一方、新たなターンの始まり、つまり「 φ 」の部分について実証的な分析を行ったのは、Clancy, Thompson, Suzuki & Tao (1996) くらいである。Clancy et al. は日本語、英語、中国語(中国大陸出身)それぞれの母語話者の友人同士による対面の会話を分析データとした³。Clancy et al. は聞き手の反応 (reactive tokens) をあいづち (backchannels), 反応表現 (reactive expressions), 繰り返し (repetitions), 再開的な型 (resumptive openers), 協力的な完結 (collaborative finishes) の 5 つのグループに分けた。その中の再開的な型 (resumptive openers) がターンの最初の部分に現れた非語彙的な音声表現である(上記の「 φ 」の出現位置にあたる)。Clancy et al. は日本語・英語・中国語の三言語の聞き手の反応 (reactive tokens) における再開的な型 (resumptive openers) の出現率は、それぞれ 12.5%, 10.4%, 14.5% となっていると報告している。

Clancy et al. は再開的な型 (resumptive openers) について定義したが、実際どのような形式が使われているかについての記述では各言語 1 例ずつ挙げただけであり、その他に詳細な記述は見当たらない。また、ターンの始まりは前置き有りのほかに前置き無しの場合も考えられる。提示された再開的な型 (resumptive openers) の比率は、聞き手の反応 (reactive tokens) 全体中の割合であり、前置き無しの場合を含むターンの始まりの形態、つまり「 φ 」における割合ではない。

本研究では、より実証的に論を進めていくために、まずターンの始まりの形態つまり「 φ 」部分を記述する。さらに、「 φ 」の各形態の出現率を日台の対照研究の観点から分析することを目的とする。

3. 分析データ及び方法

3-1. 分析データ

本研究では電話の会話を分析対象とし、それぞれ日本と台湾在住の母語話者のインフォーマントに依頼し、電話会話を録音してもらった。本国在住のインフォーマントに依頼した理由は、母語以外の言語の影響を最低限に抑制する意図からである。できる限り自然な会話データを収集するため、インフォーマントには母語の会話を研究するための資料であるとだけ告げ、詳しい研究内容と目的は伝えていない。また、方言差があるのではないかと配慮し、出身地の違うインフォーマントに依頼したが、日台とも用法の顕著な違いは見られないため、ここでは特に方言差には触れない。収集した資料のうち文字化し本研究のデータとしたものを以下に示す。

³ 英語データは 44 分、中国語データは 23 分、日本語データは 23 分、合計 90 分である。会話参加者は各言語 8 組ずつで、参加者人数は 2 人から 5 人など一定していない。

表1 日本の言語資料

インフォーマント	時期	性別	年齢	出身	件数	資料時間	電話の相手(性・人数)		
A(無職)	1998	F	60代	長野	31	約 84分	F 28	M 7	*
B(教職)	1999	F	40代	鳥取	10	約 24分	F 6	M 4	
C(教職)	1999	F	40代	東京	6	約 29分	F 6	M 0	
D(教職)	2000	F	30代	奈良	3	約 4分	F 1	M 2	

*: 1 件の電話会話の中で話し相手が複数以上変る場合。

表2 台湾の言語資料

インフォーマント	時期	性別	年齢	出身	件数	資料時間	電話の相手(性・人数)		
E(公)	1998	F	40代	高雄	9	約 19分	F 6	M 5	*
F(OL)	2001	F	20代	宜蘭	20	約 107分	F 16	M 6	*
G(サ)	2001	M	30代	台中	6	約 41分	F 3	M 3	

*: 1 件の電話会話の中で話し相手が複数以上変る場合。 公: 公務員。 サ: サラリーマン。

3-2. 分析方法

上記の電話会話資料を用い、新たなターンの開始の形態を前置き(「φ」の部分)として、実質的発話を導入する前置きがあるかないか、さらに前置き有りの使用実態を検討する。

前置きとしてあいづちが使われているのだろうか。使われているのなら、どのようなあいづちが使われるのだろうか。本研究では陳(2001, 2003)であいづちがパターン化された基準を用い、分析を行う。

陳(2001)は日本語のあいづちを発話位置と形式により5つのパターン⁴に分類し、それぞれのパターンの機能及び発話位置の相互関係を分析した。その結果、聞き手の理解の度合いにより、あいづちが使い分けられていることが分かった。つまり、聞き手が話し手の話を理解するために必要となる情報のまとまりが“I”とすると、実際のやり取りは数回にわたって伝えられ、すなわち“I”は $I_1 I_2 I_3 \dots I_n$ のように区切られる。(nは聞き手にとって話し手の話をまとめた情報として理解可能なところである)。

さらに、聞き手が話し手の話を理解するのに十分な必要情報のうちの断片を入手した時に発したあいづちを「α」(「はい」系)とし、聞き手がひとまとまりの情報を受け取り、話し手の話の全体を理解したため打ったあいづちを「β」(「そう」系・感情表現系・複合系・先取り系)とするな

⁴ 陳(2001)は「はい」系 「そう」系 その他系1 その他系2 その他系3 の分類だったが、より分かりやすくするために、ここでは、その他系1を感情表現系、その他系2を複合系、その他系3を先取り系に変更した。

らば、談話におけるあいづちの公式は「 $I_1 - \alpha - I_2 - \alpha - I_3 \dots I_n - \beta$ 」としてまとめることができる」と論じている。陳（2003）は陳（2001）の公式を踏まえた上で、台湾の「国語」及び台湾語⁵に同じ傾向⁶が見られたと報告している。

本研究は「 α 」と「 β 」という基準であいづちを分類し、新たなターンの開始で現れたあいづちを観察することによって、日台のあいづちの使用範疇の相違を考察する。これにより日台の新たなターンの開始の実態が解明できると考える。

前置きとして現れるあいづちは「 α 」なのか「 β 」なのか。陳（2001, 2003）で明らかにされたように、「 α 」のあいづちは、話し手が伝えようとする情報の断片しか聞き手に届いていないので、聞き手が話し手の話を理解するためには更なる情報の追加が必要となることから、これは話

表3 日本語のあいづち

形 式	
α	「はい」系 「はい」「うん」「ええ」、そしてそれらが反復しているものもこの系列に入れる。
β	「そう」系 「そう」という指示詞が入っていることは《「そう」系》とする。代表的なものは「そうですか↓」などである。
	感情表現系 《「はい」系》と《「そう」系》以外によく見られる驚き、反問などの感情を表す表現はこの系列に入る。例えば「へー」、「ほお」、「ふーん」などが挙げられる。
	複合系 《「はい」系》、《「そう」系》、《その他系1》など2つ以上の系列が複合した表現である。「ああ そうですか↓」が代表である。
	先取り系 話し手の話を先取る表現はこの系列に入る。

↑: 上昇調。 ↓: 下降調。

⁵ 台湾の「国語」は北京語をベースとした共通語であり、台湾では「国語」と呼ばれているが、日本語の「国語」と区別するために、ここでは台湾の「国語」と記す。台湾語は福建省の南の方言である閩南語を源としている。また、本研究では台湾の「国語」を漢字で、台湾語を教会ローマ字で示す。

⁶ 下記の例はC（70代男性）とR（50代女性）の親子の会話である。Rは、娘が仕事場に電話してきたのに声がうまく聞き取れなかったということをCに伝えている。1Rが話を切り出している時点では、CはRが何を伝えようとしているかは理解できておらず、「*hè*」というあいづちを打ち、どうぞ話を続けてくださいという態度を示した。次に3Rでは、電話の向こうから声が聞こえないという情報を持ち出した。Rの仕事場にRの娘が電話を掛けてきたが、声がうまく伝わらなかったという状況をここで初めてCは理解でき、「*hō-án-ne o-h*」という理解を示すあいづちを打った。もし、話し手の伝えようとしていることを把握できていない時点で、たとえば下記の例の2Cのところでは「*hō-án-ne o-h*」などのような「 β 」のあいづちを用いたら、相手の話を遮ることになり、不自然である。このように、台湾の「国語」、台湾語及び「中間的な表現」（表4を参照）とも、日本語と同じように理解の度合いによる「 α 」、 β 」の使い分けが認められた。

1R: [*ah tí pān-kong-thia" i kha tiān-oē tng-ai ho."*]

仕事場に電話かかってきてね

2C: [*hè*]

ええ

3R: [*tng-ai bān-kong-thia" kiāh-khi-lai lóng bó sia"*]

仕事場で受話器とったら 声が聞こえないの↓

4C: [*hō-án-ne o-h*]

ああ そうか↓

表4 台湾の「国語」と台湾語のあいづちの系列⁷

	「国語」	台湾語	「中間的な表現」 ⁸
α	「嗯」	「he ⁿ 」	「hə ⁿ 」「m ¹ 」「hm ¹ 」「hn ¹ 」 「ə ⁿ hə ⁿ 」「m hm ¹ 」
β	「這樣」「對」「好」「哦」 「真的」「啊」「是」「是 哦」	「án-ne」「tió'h」「hó」「o ¹ 」 「hióh」「he ⁿ ah」「hā ⁿ ah」 「ho ¹ 」「ho ¹ 」」「hiau lah」 「wa ⁿ 」 ⁽¹⁾ 「o ¹ ho ¹ 」 ⁽²⁾	「OK」「m̂」 ⁽³⁾ 「hè ⁿ hè ⁿ hè ⁿ 好啊」 ⁽⁴⁾

- (1) 「waⁿ」のほか、「aⁿ」「haⁿ」の表現も観察された。陳(2003)では「驚き・反問」の系列として分類している。文字通り、驚きや反問を表す表現である。その中の「hāⁿ」という反問の表現は驚きの表現としても使えるため、陳は「驚き・反問」というふうになづけた。
- (2) 陳(2003)で名づけた「複合」系である。「複合」系とは「驚き・反問」系以外の台湾語の「 β 」の表現が複合した表現であり、代表的なものは「o¹」+「ho¹」(5つのバリエーションがある)、「o¹」+「hó」(4つのバリエーションがある)、「o¹」+「án-ne」(4つのバリエーションがある)、「ho¹」+「án-ne」(5つのバリエーションがある)などが挙げられる。
- (3) 「m̂」は α の「m」系の声調と異なり、反問を表す表現である。そのため、陳(2003)では中間的な表現の「反問」系として名づけた。
- (4) 陳(2003)でいう「国台中複合」系であり、台湾語と「中間的な表現」・台湾語もしくは「中間的な表現」と台湾の「国語」との複合表現であり、「həⁿ həⁿ həⁿ hióh」,「əⁿ hō¹ hō¹ hō¹ həⁿ həⁿ həⁿ」,「哦真的哦 həⁿ həⁿ」などの表現例が観察された。

の続行を意味するサインである。一方、「 β 」のあいづちは、話し手から十分な情報が伝えられた結果、話の全体像が聞き手に理解できたことを意味するサインである。したがって、新たなターンの開始、つまり、聞き手がターンを取り、自ら話し手になろうとする場合には、「 α 」より「 β 」を打つという仮説が立てられる。なぜなら、話し手の質問によってターンが聞き手に渡されて聞き手が次の話し手になる場合を除くと、聞き手が自らターンを取る場合(話が聞き取れない、あるいは情報に対する確認の聞き返しなどを除く)は、話し手の話が一段落し、話し手の話が把握できたときに起きると考えられるからである。

また、日本語学習者があいづちを打たずに新たなターンに移行することに日本語母語話者が違和感を持つという報告(伊藤 1993 など)から、日本語においては「あいづち + 実質的発話」のパターンが一般的なターンの開始の型であるという仮説も立てられる。

以下においては、この2つの仮説の検証という視点に立って、日台のターンの始まりの形態について検討していく。

具体的な検証作業に入る前に、本研究におけるターンタイプの捉え方について説明しておく。本研究のようにあいづちに焦点を当てた研究では、あいづちという言語行動を包摂できるよう

⁷ アクセントによる相違が見られないため、ここでは便宜上、同じ形式のものをアクセント抜きで形式のみ系列を作った。系列を指していないときにアクセントつきのものを表記する。

⁸ 台湾の「国語」と台湾語との長年にわたる相互間の影響により、典型的な「国語」や台湾語の表現から派生した表現及び台湾語と「国語」の形式が混在していることが観察された。それらの表現を「中間的な表現」とする。

な分析単位が必要であるため、金(2001)の「主流ターン」「非主流ターン」⁹という、ターンを全て記述できる概念を援用する。

金はターンを分類した上で、日本語を中心に、「主流ターン」と「非主流ターン」を含めた話者交替のパターンを示した。これは、ターンシフト(turn-shift)¹⁰が見られないパターンとターンシフトが見られるパターンの2つのタイプである。

本研究は金の概念をふまえた上で、主流ターン(以下ターンと記す)に非主流ターン(笑いを含む)が割りこんでいるかどうかという基準でT1とT2に分けた。T1とは非主流ターンが割りこんでいない場合で、T2とは非主流ターンが割りこんでいる場合である(「↑」は割り込みを表す)。図で示せば、以下の通りである。新たなターンの始まりの形態とは「φ」という記号で示している部分であり、前置き無しの可能性もあれば、前置き有りの可能性もある。本研究では、T2を分析対象とし、T2の冒頭の形態に着目する。T2に注目した理由は、本研究の資料で見られたT1の発話がほとんど1つの語や句で終了する短い発話で直ちに次の話者へと交替したため、より長く続くターンつまりT2の始まりに焦点をあてたかったからである。

本研究におけるターンのタイプ

「T1」

A: φ+ ターン

「T2」

A: φ+ ターン

↑ ↑ ↑

B: 非主流ターン

4. 分析結果

4-1. 新たなターンの始まりの形態

まず、日台のターン(ここではT2のみ)の始まりの形態として、前置き無しと前置き有りの2つに分け分析を試みようとした。ところが、「ため息」、「舌打ち」、ことばを間違っ言いなおす前のことばにならない表現など、「前置き無し」と「前置き有り」のどちらにも当てはまらないものがあつたため、新たに「その他」を設けた。

前置き有りの形態において、日本語は「そう」系、「あ」系といったあいづちの形式のほか、

⁹ 「主流ターン」とは「実質的な発話でフロアーを取り得る内容のターン(金2001: 154)」で、「非主流ターン」には「あいづち」、「予期失敗」、「同時開始」の3つがあり、「あいづち」がそのうちの大半を占めている(金2001: 154)。

¹⁰ ターンシフト(turn-shift)とは1つの主流ターン内に埋め込まれている主流ターンと非主流ターンの移行である(金2001: 155)。

「あのう」などの形式も見られている。一方、台湾の「国語」と台湾語は「對」系、「真的」系、「哦」系、「*heⁿ ah*」系などのあいづちの形式のほか、「那(じゃ、それなら)」などの形式も使われている。

これらの表現を「ディスコースマーカ―」と名づけ、一括して扱うこともできる。なぜなら、ディスコースマーカ―とは Redeker (1991: 1168) の言う、接続詞、副詞、間投詞など、直前のディスコースのコンテキストを含み、次に発せられるであろう発話を聞き手に意識させるマーカ―を指すもので、「ディスコースマーカ―」にはあいづちも含まれるとされてきた(橋内 1999, Routledge Dictionary of Language and Linguistics 1996 など)。しかし、陳 (2001, 2003) で言及された「そう」系、「あ」系、「對」系、「真的」系、「哦」系、「*heⁿ ah*」系などのあいづち形式は主に話し手の話の途中及び新たなターンの始まりの両方に現れるのに対し、「あのう」や「那(じゃ、それなら)」などといった表現形式は新たなターンの始まりに頻繁に現れるが、話の途中では見られない表現である。出現可能な箇所が異なる形式を一括して扱うと、それぞれ本来果たす役割や異なる言語による使用傾向をよりリアルな形で浮き彫りにすることが難しいと思われる。そこで、区別のため、前置き有りの下位分類として、陳 (2001, 2003) で抽出されたあいづちの形式を「あいづち」とし、それ以外の表現形式をディスコースマーカ―とする。本研究で得られた代表的なディスコースマーカ―としては、日本語においては「あのう」が 29 例 (39.2%)、「で」、「それで」が 15 例 (20.3%)、「じゃ」が 11 例 (14.9%)、「ええと」が 4 例 (5.4%) である。一方、台湾の「国語」と台湾語では、「那(じゃ、それなら)」が 7 例 (24.1%)、「因為(なぜならば)」が 4 例 (13.8%)、「但是(しかし)」が 4 例 (13.8%)¹¹ の順になっている。新たなターンの始まりである「 φ 」の各形態の割合を表 5 に示す。

表 5 日台のターンの始まりの形態

	前置き無し	前置き有り		DM	その他		合計
		あいづち			ため息, 言いなおし, 舌打ち等	繰り返し	
		α	β				
日	64 (31.1%)	20 (9.7%)	34 (16.5%)	74 (35.9%)	5 (2.4%)	9 (4.4%)	206 (100%)
	64 (31.1%)	128 (62.1%)			14 (6.8%)		
台	62 (25.2%)	8 (3.3%)	126 (51.2%)	29 (11.8%)	11 (4.5%)	10 (4.1%)	246 (100%)
	62 (25.2%)	163 (66.3%)			21 (8.5%)		

■: 頻度が高いもの。DM: ディスコースマーカ―。

あいづち: あいづちのみとあいづち + DM の 2 つの場合を含む。 α と β においては、 α のみと α + DM, β のみと β + DM の 2 つの場合を含む。 DM の場合も同様である。その詳しい内訳は表 6 を参照。

¹¹ 「那(じゃ、それなら)」の 7 例 (24.1%) は全て台湾の「国語」である。また「因為(なぜならば)」の 4 例 (13.8%) では、台湾の「国語」が 3 例、台湾語が 1 例で、「但是(しかし)」の 4 例 (13.8%) では、台湾の「国語」と台湾語の例が 2 例ずつ存在した。

4-2. 前置き無しの場合

まず、前置き無しに実質的発話を始めたケースをみる。

(用例の表記記号: C: 掛け手, R: 受け手, =: 相手の話の後にすぐ発話する場合, 𠄎: 改行によって区切られた同一発話, --: 音を伸ばしているとき, //: 2人が同時に発話し始める点, (1): ()の中の数字はポーズの長さ, T: 新たなターン, ↑: 上昇調。)

例 1

- 1C: あのう、できる人↑
 2R: はい
 T2 3C: 入れる人は M さんのところに連絡してください
 →T2 4R: 来年のりゅうが、これ、あ、来年の留学生相談 // 室に
 5C: // うん

例 1 では、C (女・40代) がクラスの連絡事項を R (女・20代) に伝えている。学内に、留学生の生活や学業の支援のために設置された相談室があり、その相談室では来年度のチューターを募集しており、興味がある人は M さんのところに連絡をしてほしいという内容である。4R は 3C の話が一段落したところで、前置き無しで新たなターンを始めている。

例 2

- 1C: [hò-án-ne o-h, bô-iàu-kín lí seng kā m̄ng khòà" nā ū ho-" lí] 顔色[khah]鮮艷[án-ne tiò'h hó ah]
 はあ↓ そうですか↓、いいよ↑先に聞いてみて もしあれば、色が鮮やかな方がほしい
 2R: [hè"
 ええ
 T2 3C: [in-ū i beh, i beh khah]突出[ê]嘛
 なぜなら、彼女は目立つ方がほしいから
 →T2 4R: [gún téng-jī't hóe kòe-hhi--]W[hít-ê ê sí-chūn hò-"
 この間 W にいった時にね
 5C: [hè"
 ええ

例 2 は、C (女・50代) が妹の R (女・40代) に自分の娘が欲しがっている伝統衣装について尋ねている場面である。その衣装は R の近所の「原住民」のものなので、彼らがそれを持っているかどうかを C は尋ねている。C は自分の娘が目立つ模様を探しているので、できれば鮮や

かな色彩が施されているものの方がいいということ R に伝えた。4R はそれを受け、先日「原住民」の集落がある W (地名) にいった際にちょうど「原住民」の祭りがあり、そこで彼らの伝統衣装を売っていたという話をこの後展開していた。

4-3. 前置き有りの場合

次は前置きを置いてから実質的発話が始まったケースを見る。前置きはディスコースマーカ―とあいづちに大別できる。

4-3-1. 前置きがディスコースマーカ―の場合

例 3

1C: 何か医療 医療器 医療 =

2R: = うん

T2 3C: 医療器械のなんっ

→T2 4R: **あのを** なんとか決まっ あのをね その方がいいっていうけどね

5C: うん (網掛けは新たなターンの始まりの前置き)

例 3 では、嫁(C・30代)が姑(R・60代)にマッサージ器について相談を持ちかけている。R が C にどこのメーカーの器械かと尋ねたところ、C は一生懸命思い出そうとしていた(1C から 3C)。しかし、R は C が思案している途中で、「あのを」を発して(4R)、自分の意見を述べ始めた。

例 4

1C: 所以你, 所以你的同屆同學應該有人是 62 年 10 月 // 11 月的

だから, だからあなたの同期生で 62 年(民国)10 月, 11 月生まれの人はいるはず

2R: // 真的哦

本当

T2 3C: 對, 或 12 月 // 那都跟你們同屆

そう, あるいは 12 月とか同期なの

→T2 4R: // **但是** 我都没有那印象啊, 我的印象中大家都是同様同一, 學年 (0.6) 都是 63 年次

しかし, 全然印象がない, イメージの中で皆同じ, 學年 (0.6) 同じく 63 年

例 4 では、R (女・20代) は、同じ年¹² に生まれていれば、同期生になると思いこんでいたが、

¹² ここの 62 年, 63 年とは台湾の暦の表記法「中華民國」であり、紀元 1973 年と 1974 に相当する。なお、インフォーマントの個人情報に関わるため、年はずらした。

C (女・30代)がそれは違うと説明を行っている。台湾では9月入学が基準で、9月前に生まれた人達はその年度に入学できるが、9月以後の生まれの人達は次年度の入学になるため、同期生の中には前年の10月から12月生まれの人がいるはずということである。4Rはそれについてまったく印象に残っていないと発話を打ち出し、前置きとして逆接の「但是(しかし)」を用いている。

4-3-2. 前置きがあいづちの場合

例 5

- 1C: あす 私あのお6日にね
 2R: うん
 3C: あのお Kさんところへ
 4R: うん
 T2 5C: いきますけど、ワンちゃんの注射をしてもらえながら (0.6)
 →T2 6R: あっ (0.7) Nちゃんね
 7C: うん (1.8)
 8R: XXが何か痛いんですけど XXX出てるけど

例5では、C(女・60代)がR(女・70代)に明日の予定を告げた後に、6Rが知り合いのNの体調が悪いというまったく異なる話題を持ちこんだ。その際前置きとして、「β」のあいづち(「あっ」)が使われている。

例 6

- 1R: 好像在吸收知識這樣子啊[hè' ah]所以(1)我是覺得還蠻有, 還蠻不錯的啦 // 然後又
 知識を獲得しているようで そうよ だから(1)いいと, いいと思うのそして
 2C: //xxx
 3R: 不會說忙到很忙這樣子啊
 忙しくなることもあまりないし
 T1 4C: 知性跟感性的 // xx 都, 都有這樣子
 知性と感性 XX, 両方具えているということだね
 T2 5R: // 對啊 對啊 因為你就會, 對啊一方面對啊, 就像你說的這樣
 そうよ そうよ つまり, そうよ 一方ではねそうよ, 言った
 子知性與感性因為你知性的東西你會知識會進來嘛
 通りに知性と感性だって知性のことって知識の獲得に繋がるんだもの
 6C: [m]
 うん

例6の場面で、C(女・30代)がR(女・20代)に現在の仕事の様子を尋ねたところ、Rは自分にとって仕事がとても勉強になるもので、忙しすぎるということはなく充実していると答えた。4Cはそれの補足をしているようで、知性と感性を兼備している仕事ですねと発言し、5Rはそれを受け、「對啊(そうよ)」を発した後に、話をさらに展開させている。

4-4. 日台の比較

小室(1995)ではマーカー¹³無しに実質的発話で始まるターンの取り方は不適当な話者交替であると指摘している。しかし、表5の結果を見てみると、前置き無しにすぐさま新たなターンを始める場合においては、日本語(31.1%)が台湾の「国語」及び台湾語(25.2%)より多いことが分かる。ただ、日台ともに全体の2~3割という高い数値を示していることは、友人や知人の会話を中心としている本研究の資料の性質に関係があると推察される。

さらに、前置き有りの形態を下位分類してみると、あいづちとディスコースマーカーに分けることができる。その割合からみると、日本語では、ディスコースマーカー(35.9%)が多く使用されているのに対し、台湾の「国語」や台湾語では、「β」のあいづち(51.2%)が多用されていることが分かる。日本語においては、ターンの始まりの箇所にあいづちを使うことは台湾語より少ないことが注目される(日: 26.2%; 台: 54.5%)。

また、この結果は台湾人日本語学習者が、「あのう」とか「ええと」をなかなか習得できず、「アー」や「ウンー」など明瞭ではない音声でそれを代用しているという鮫島(1992)の報告の裏づけになるであろう。台湾人にとっては、自分が話し手になる場合にディスコースマーカーよりあいづちを用いる方が母語の言語習慣を反映しており、「あのう」などの機能をなかなか理解できないからではないだろうか。

ところで、新たなターンの始まりに使われるあいづちとディスコースマーカーを量的に調べたところ、あいづちとディスコースマーカーが併用されている場合も少なくないことが分かった。この場合、最初に現れた形態を基準にして分類することとした。「あいづち+ディスコースマーカー」の場合は「あいづち」のグループに入れた。一方、「ディスコースマーカー+あいづち」のパターンは日台の資料において1例ずつ¹⁴しか観察されなかった。日台ともあいづちとディスコースマーカーが共に使われる場合はディスコースマーカーの前にあいづちがくることが分かった。あいづちのみ、ディスコースマーカーのみ、「あいづち+ディスコースマーカー」のそれ

¹³ 小室(1995)で述べている「マーカー」は本研究の discourse markers を指す。

¹⁴ 日本語の例は「だもんでね(0.9) あっそうかね あたし また あのうこれ荷物出しに行ったりするもんで」という発話であり、ディスコースマーカーとあいづちの間には0.9秒のポーズがある。台湾の「国語」と台湾語の資料において、「不過、對啊、可是、其實後來想一想大家、除非你結婚或什麼其、或者說--(しかし、そうよ、でも、実は後で考えれば、皆、結婚しない限り、あるいは他、あるいは...)」という発話になり、あいづちはディスコースマーカーの後に現れている。

それぞれの割合を計算すると以下の表 6 で示した通りとなっている。

表 6 ターンの始まりのあいづちとディスコースマーカ-の併用(日台)

	あいづちのみ		DMのみ	DM + あいづち		あいづち + DM		合計
	α	β		$\alpha + DM$	$\beta + DM$	$\alpha + DM$	$\beta + DM$	
日	12 (9.4%)	17 (13.3%)	73 (57.0%)	0 (0%)	1 (0.8%)	8 (6.3%)	17 (13.3%)	128 (100%)
	29 (22.7%)		73 (57.0%)	1 (0.8%)		25 (19.5%)		
台	6 (3.7%)	68 (41.7%)	28 (17.2%)	0 (0%)	1 (0.6%)	2 (1.2%)	58 (35.6%)	163 (100%)
	74 (45.4%)		28 (17.2%)	1 (0.6%)		60 (36.8%)		

DM: ディスコースマーカ-。

表 6 からみると、ディスコースマーカ-のみで新たなターンを始める例は、日本語では 57.0% であるのに対し、台湾の「国語」及び台湾語では 17.2% となっている。一方、「あいづち + ディスコースマーカ-」は日本語では 19.5% であり、台湾の「国語」と台湾語は 36.8% である。すなわち、ディスコースマーカ-を使う際に、台湾人は日本人よりもディスコースマーカ-の前にあいづちを置く傾向が強いということがうかがえる。表 5 と表 6 をまとめてみると、日本語に比べ、台湾の「国語」と台湾語はディスコースマーカ-よりあいづちを多用することが示されたと言えよう。

次に、あいづちに焦点を絞って考察してみよう。日本語では「 α 」(9.7%)と「 β 」(16.5%)は比較的均等に使われているが、台湾の「国語」及び台湾語の場合では、「 β 」(51.2%)が「 α 」(3.3%)を圧倒していることが分かった(表 5 を参照)。

形式に関しては、日本語の「 α 」のあいづちは「はい」、「ええ」、「うん」などがみられるのに対し、台湾の「国語」と台湾語の「 α 」のあいづちでは台湾語の「*heⁿ*」系に限られており、台湾の「国語」の「嗯」は見当たらなかった。「 β 」のあいづちに関しては、以下のようにまとめられる。

表 7 新たなターンの始まりの「 β 」のあいづちの形式

日	形式	あ	そう	ほお	はあ	ふーん	複合									合計
	数		13	8	3	1	1	8								
割合		38.2%	23.5%	8.8%	2.9%	2.9%	23.5%									100%
台	形式	對	哦	好	啊	真的	<i>heⁿ ah</i>	<i>ho</i>	<i>ho^o</i>	<i>hoⁿ</i>	<i>ah</i>	<i>hioh</i>	<i>tioh</i>	その他	混合	
	数	41	12	8	6	5	12	2	10	1	7	3	1	9	9	126
割合		32.5%	9.5%	6.3%	4.8%	4.0%	9.5%	1.6%	7.9%	0.8%	5.6%	2.4%	0.8%	7.1%	7.1%	100%

■：頻度が高いもの。「あ」:「あっ」や「ああ」。「そう」系:「そうですね」など「そう」という表現が入っているもの。複合:「ああ はい」のように「 α 」と「 β 」が混ざっている表現や、「ああ そうですか」のように「あ」と「そう」系が入り混じっている表現。混合:台湾の「国語」の異なる系列の複合したタイプ 1 例、台湾語の「複合」系 6 例、「中間的な表現」の「国台中複合」系 2 例。

表7から分かるように、日本語の形式は「あ」系(38.2%)、「そう」系(23.5%)、複合系(23.5%、8例中「あ」+「そう」は5例)などが頻繁に見られた。一方、台湾の資料においては、台湾の「国語」の「對」系(32.5%)が最も用いられ、台湾の「国語」の「哦」系(9.5%)、台湾語の「*heⁿ ah*」系(9.5%)と「*ho*」系(7.9%)、台湾の「国語」の「好」系(6.3%)が次に続いている。しかし、台湾の「国語」の「啊」系と台湾語の「*ah*」系は置かれている文脈は異なるが、同じ発音なので両方をあわせると10.4%となり、「對」系に次いで二番目に多い形式となる。一番多かった「對」系はすべて台湾の「国語」の形式で、台湾の「国語」の文脈に現れ、台湾語の文脈においては観察されなかった。

また最も多く見られた台湾の「国語」の「對」系(32.5%)と二番目に多く見られた台湾語の「*heⁿ ah*」系(9.5%)は相手の考え方や意見などに同調を表す表現であり、「對」系と「*heⁿ ah*」系が42.0%を占めており、台湾人は相手と同調を示しつつターンを取ることを好むと言えよう。

5. 考 察

ここまで見てきたように、新たなターンを始めるときには、必ずしも前置きを置いてから実質的発話に移行するわけではない。すぐさま実質的発話を始めるときもあれば、あいづちなどを打ちながら実質的発話に移行する場合もある。小室(1995)で述べられている不適切な話者交替(前置き無し)は実際の言語資料には多数存在していることが示された。今回の資料は知人や友人間の会話が多いため、このような結果が得られたとも考えられるが、不適切であるか否かは会話の当事者間の人間関係を考慮した上で、評価する必要があると思われる。

新たなターンの始まりに現れた前置きの形態について、日本語はディスコースマーカーが多く用いられるが、台湾の方はディスコースマーカーの割合は高くはなく、あいづちの使用が目立つ。あいづち使用に関しては、日本語では「 β 」のあいづちが「 α 」より多く観察されたものの、両方とも比較的均等に使用されていることが分かった。それとは対照的に、台湾の会話では「 β 」のあいづちが圧倒的に多く用いられていることが分かった。

「 α 」、「 β 」各々の種類の面では、日本語は「そう」系、「あ」系などが中心となって使われている。一方、台湾の「国語」と台湾語では、「對」系、「啊」系、「*ah*」系、「哦」系、「*heⁿ ah*」系が頻繁に現れた。一番多く見られたのは台湾の「国語」の「對」系であった。

台湾の「国語」の「對」系や台湾語の「*heⁿ ah*」系は強く相手を肯定したり、相手の意見に賛成したりする場合に使われる。この「對」系や「*heⁿ ah*」系を多く用いると相手をフォローしながらターンをとることができ、相手の面子を脅かさずに互いの均衡を保つ効果が得られると考えられる。

以上をまとめると、新たなターンの展開においては、日本語ではあいづちよりディスコース

マーカ―などが好まれ、台湾の「国語」や台湾語では、ディスコースマーカ―も用いるものの、相対的には、「β」を多用する傾向にあると言えよう。Jefferson (1984) は英語の“yeah”と“mm hm”を承認表現“acknowledgement tokens”とした上で、“yeah”が聞き手から話し手に切り替わる準備で、“mm hm”が受身的受取“passive reciprocity”であると論じている。Jefferson が述べた“yeah”の説明に従えば、日本語ではあいづちよりディスコースマーカ―の方が話し手を切り替えようとする働きが強く、一方台湾の「国語」と台湾語においては「β」のあいづちがその機能を担っていると言えよう。

また、「α」のあいづちはもともと肯定の意味を持つとは言えるが、だからといって必ずしも同意を示しているわけではない。例えば以下の例 7 がそうである。C は知人の R に魚のお土産をあげようとしたが、R の介護を受けている義理の父親が自宅にいるかどうかによって、あげる魚の量を決めたいため、R に義理の父親がいるかどうか尋ねた。1R は退院が決まったことを伝え、3R はさらにそれについての話題を続けようとしていたが、4C は詳細について尋ねているわけではなく、在宅であるかどうかだけを確認したかったため、「うん」というあいづちで話しを受け流し、自分の用件を切り出している。また、例 8 では、C が R に自分の転職の問題について相談を持ちかけたところ、R は C の転職したがっている F 工場は W (地名) にあり、現在の生活環境と異なるため、環境適応の問題も考慮した方が良いとアドバイスした。1C は、自分がかつて W 地方にある S 大学にいたので環境適応に関しては問題がないと異議を持ち出したが、2R は「對啊(そうよ)」というあいづちで一旦 1C の話を受けとめてから、仕事と勉強は別問題だと言いつ返している。

これらの例からみると、あいづちは先行発話に対しては働きかけているが、後続する発話とは必ずしも同等な意味を持つとは限らない。すなわち、肯定の形であるあいづちの後に必ずしも肯定の意味内容が後続しているわけではない、ということである。

ターンの始まりのあいづちは先行する発話への協調性を示しつつ、異なる立場の話でも用いられやすいところから、いわば潤滑油のように、より円滑に次の話題に進める役割を果たしていると推察される。

例 7

- 1R: 27日に退院決まったの↓
 2C: うんー↓ うんー↓
 T2 3R: うん だから
 →T2 4C: うん, いやそれはいいけどさ
 5R: うん

例 8

- T1 1C: 我之前在 S 大啊(1)

- 私は S 大学にいったのよ(1)
- T2 2R: 對啊, 但是因為工作跟念書可 // 能
 そうよ, しかし仕事と勉強は
- 3C: // x, 不一樣
 X, 違う
- 4R: 不一樣啦[hò~], 這是一個啦, 啊另外一個就是說(1.7)F 廠是一個蠻--(0.5)挑戰性高的廠啦
 違うし, これ一つ, もう一つは(1.7)F 工場はとても(0.5)挑戰性が高いところで

従来の研究では「聞き手が話し手の話している間に送るメッセージ」としてのあいづちが中心に議論されてきたが, 新たなターンの開始箇所に出現するあいづちを論じる論文はまだ多くない。しかし, ターンの始まりのあいづちをあいづちと考える研究もある。畠 (1982) は次のように述べている。

「...発話者は, 相手が自分の発話をさえぎって, 発話をはじめてもよいポイントを自分の発話の中に作りながら, そのポイントで相手が発話を開始すれば, 自分の発話を中断し, 相手が発話を開始しなければ, 自分の発話を続けるというような態度で, 会話に参加している。このようなポイントを「発話開始許容点」と呼ぶことができるであろう。あいづちは原則としてこの発話開始許容点でうつ。」 (畠 1982: 66)

畠は上記の理由であいづちには「話しを続けてください」と「私に発話させてください」という機能があると論じている。

畠が言う「私に発話させてください」という機能は「あいづち+実質的発話」におけるあいづちの典型的な機能だと考えられる。この「発話させてください」というのは相手への予告であると同時に, 新たなターンを内容的に整えるにあたっての時間稼ぎ, つまり新たなターンへの移行の準備とも言える。ターンの始まりのあいづちはまさに発話と発話の繋がりに関わる存在であり, 会話進行において極めて重要な役割を担っていると考えられる。しかしながら, これらの重要な役割を果たすものが, 日本語では, 「 α 」, 「 β 」のあいづち, 特にディスコースマーカーであるのに対し, 台湾の「国語」と台湾語ではあいづち, 特に「 β 」のあいづちであるという, 日台間の相違が見られたのである。

6. ま と め

本研究で明らかになったことをまとめると次のようになる。

- ① 新たなターン(あいづちに1回以上割りこまれていた比較的最長いターンの)の始まりにおいて

あいづち等が必ず出現しているとは限らず、前置き無しに直接的に実質的発話に入る場合が日台とも2~3割前後の割合を占めている。

- ② 新たなターン(あいづちに1回以上割りこまれている場合)の始まりにおいて、台湾の「国語」と台湾語では日本語に比べてあいづちが好まれる。一方、日本語ではディスコースマーカーが多用される傾向がある。
- ③ 「あいづち+実質的発話」のあいづちは、日本語では「β」が「α」よりやや用いられやすい程度であるが、台湾の「国語」と台湾語では「β」のあいづちの使用の方が圧倒的に多かった。
- ④ 「あいづち+実質的発話」の形式において、日本語は「そう」系や「あ」系などが中心になっているが、台湾の会話では台湾の「国語」の「對」系、「啊」系、「ah」系、「哦」系、「heⁿ ah」系などが多くみられた。「對」系や「heⁿ ah」系という表現は強く同意したり、肯定したりする意味合いをもつことから、自らターンを取る場合において、相手の面子を脅かすことをやわらげる働きがあると考えられる。

本研究を通して日台の新たなターンの開始とあいづちの関係について分析してきた。今後は新たなターンの開始と先行発話との関係を明らかにしていきたい。

参考文献

- 伊藤博子(1993)「談話の指導——バックチャンネルからの展開——」『日本語学』12巻8号, 78-91.
- 金志宣(2001)「turn-taking パターン及びその連鎖パターン—韓・日の対照会話分析」『人間文化論叢』4巻, 153-166.
- (2002)「Turn-taking 研究の動向: “turn” と “turn-taking” をめぐる議論を中心に」『第二言語習得・教育の研究最前線——あすの日本語教育への道しるべ——言語文化と日本語教育』2000年5月増刊特集号, 205-221.
- 小室郁子(1995)「“Discussion”における“turn-taking”——実態の把握と指導の重要性——」『日本語教育』85号, 53-65.
- 陳姿菁(2001)「日本語の談話におけるあいづちの類型とその仕組み」『日本語教育』108号, 24-33.
- (2003)『会話のプロセスにおけるあいづちの構造——日・台の電話会話の場合——』お茶の水女子大学博士論文(未公刊).
- 橋内武(1999)『ディスコース——談話の織りなす世界——』, くろしお出版.
- 畠弘浩(1982)「コミュニケーションのための日本語教育」『言語』12月臨時増刊号, 56-71.
- 村田晶子(2000)「学習者のあいづちの機能分析——『聞いている』という信号, 感情・態度の表示, そしてturn-taking に至るまで——」『世界の日本語教育』10号, 241-260.
- Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R., & Tao, H. (1996) The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin, *Journal of Pragmatics* 26, 355-387.
- Jefferson, G. (1984) Notes on a systematic deployment of the acknowledgement tokens “YEAH” and “Mm hm”, *Papers in Linguistics* 17, 197-216.
- Redeker, G. (1991) Linguistic markers of discourse structure, *Linguistics* 29-6, 1139-1172.

Routledge Dictionary of Language and Linguistic (1996), London: Routledge.